「好奇心」

―２稿―

2024/5/31

米俵

〈人物表〉

神田　佑太　（13）　私立中一年生
橘　湊　（13）　私立中一年生
大橋　奈々　（13）　私立中一年生
児島　浩二　（13）　私立中一年生
やません　（48）　山本先生。一年の学年主任

〈ログライン〉

・佑太たちはこっくりさんをやろうとするが、児島に促されて帰る話

〈ねらい〉

・何も起こらない話を書く

1.

学校・教室（夕）

ホームルームの終わった教室。パラパラと帰宅を始める生徒たち。
テスト範囲の書かれた掲示物。
神田佑太（１３）と橘湊（１３）が合図するように目を合わせる。
大橋奈々が帰ろうとするが、後ろの座席の佑太が大橋奈々（１３）のバッグを掴む。
奈々、佑太を一瞥して溜息をつく。

× × ×

誰もいなくなった教室に三人だけが残っている。
ニヤけた表情の湊が、佑太と奈々に近付いてくる。

湊　「で、佑太、今日は何やるの？」
佑太　「こっくりさんだよ」
湊　「何それ」
　奈々、大きな溜息。
奈々　「私、帰るから」
佑太　「待てって」
奈々　「塾あるから。二人でやりなよ」
湊　「奈々、こっくりさんって知ってんの？」
奈々　「……」
佑太　「奈々ー、帰るなよー」
　佑太、奈々のバッグを掴み直す。
奈々　「くだらないことしてないで、佑太と湊も勉強しなよ」
佑太　「勉強はもういいだろー。同じとこ受かったんだし」
奈々　「あんたみたいな馬鹿と同じ学校なのが悔しいわ」
佑太　「俺、やれば出来る子だから」
　佑太、手でハートを作る。
湊　「付き合ってやれば？　馬鹿出来るのも今だけだし」
　佑太、大きく頷きながら、
佑太　「そうそう。湊は、いいこと言うな」
奈々　「あんたは今も大人になっても馬鹿だよ」
佑太　「そういうとこが好きなんでしょ？」
　奈々、無視して、

奈々　「成績、落ちたらあんたのせいね」
佑太　「(ふざけて)ちゃんと勉強して下さいね」
　奈々、佑太を睨む。
湊　「で、こっくりさんって何よ」
　佑太、得意気に、
佑太　「昔流行った降霊術だよ」
奈々　「あれは、不覚筋動で動いてるだけだって」
湊　「奈々詳しいじゃん」
奈々　「一時期ちょっとね……」
佑太　「不覚筋動？」
湊　「筋肉だろ」
佑太　「おいおい、夢ないこと言うなって。とにかく、俺はやってみたい」
奈々　「なんで、そんなにやりたいの？」
佑太　「ただの好奇心」
　奈々、呆れた表情。
湊　「昔からこういうヤツじゃん」
奈々　「でも、こういうのって、ふざけてやるもんじゃないよ」
湊　「そうなん？」
奈々　「そういうの読んだことある……」
　湊、奈々、佑太の方を見る。
　一瞬、静かになる。
佑太　「下がること言うなよー。大丈夫だって」
　その瞬間、机に置いてあった佑太の鞄が突然落ちる。
　驚く三人。
佑太　「ごめん、ごめん。当たったわ」
湊　「びびらせんなよ」
佑太　「余興だよ、余興」
　奈々、嫌そうな表情。
湊　「どこでやんの？」
　奈々、佑太の席を指さして、
奈々　「ここでいいでしょ」
佑太　「俺の席……は、やめとこうか」
　湊、馬鹿にしたように、

湊　「大丈夫って言ってただろ？」
　佑太、立ち上がって、
佑太　「じゃあ、湊の席でやろう」
　湊、佑太を引き止めて、
湊　「よく知らないもんは俺の席でやりたくない」
奈々　「なんだ。２人共、怖いんじゃん」
佑太　「奈々の席でいいか」
湊　「だな……」
奈々　「やだ。無理」
　一瞬の間。
湊　「席すら決まらないとか……」
奈々　「教卓の前は？」
　三人、一斉に座席を見る。
佑太　「こじこじの席か……」
湊　「あいつなら、何かあっても許してくれそうだな」
　佑太、手を合わせて、
佑太　「こじこじ、すまん……」
×　×　×
　教卓の前の座席に集まっている３人。
　机の上には佑太のタブレット。タブレットには５０音、はい・いいえの文字と数字が書かれている。
湊　「本当にこれで大丈夫か？」
佑太　「こっくりさんにもデジタルの時代がきてると思う……」
奈々　「これ、コインが滑り過ぎない？」
湊　「確かに……」
　佑太、少しふてくされて、
佑太　「白い紙がなかったんだよ」
奈々　「仕方ないなー」
　奈々、バッグから紙を取り出し、渡す。
佑太　「流石！」
　３人で、準備を始める。
×　×　×
　机の上に５０音、はい・いいえの文字と数字が書き終わった紙が置かれている。

静かな教室。

佑太「めちゃくちゃ、それっぽくなったな」

奈々「やっぱり、やめない？」

佑太「ここまで書いたのに？」

奈々「そうなんだけど……あんまり良くないっていうか」

佑太「でも、さっき、不覚なんとかって言ってたじゃん」

奈々「不覚筋動ね……」

浮かない顔の奈々。

その時、廊下を歩く音がする。

佑太「(小声で)やばい。やませんかな？」

静かな教室に近付いてくる音。

三人、心配そうに、教室の扉の方を見る。

教室の前で足音が止まる。

教室の扉が開く。

児島浩二（１３）が教室に入ってくる。

児島、３人がいたことに驚いて、

児島「何してんの？」

３人、安心した様子で、

佑太「なんだよ、こじこじかよー」

児島「え？」

湊「やませんかと思った」

児島「ってか、俺の席で何してんの？」

奈々、慌てて立ち上がって、

奈々「あっ、ごめん。席借りてた」

児島「いいけど……こっくりさん？」

佑太「そうそう、やる？」

児島「あー、どうりで……」

奈々「え？」

児島、自分の机の中をあさり、黒い保冷バッグを取り出す。

佑太「なにそれ」

佑太、湊、奈々、興味津々でバッグに顔を近付ける。

児島、袋から弁当箱を取り出す。

佑太「うわっ、くっさ」

湊　「やっぱ」
　奈々、けわしい顔。鼻をつまむ。
児島　「(嬉しそうに)４週間前の弁当箱」
　児島、弁当箱を開けようとする。
湊　「(口呼吸で)やめろ。絶対に開けるな」
児島　「なんで？　これからが面白いのに」
佑太　「お前っ、ふざけんなよ」
　奈々、ふり絞った声で、
奈々　「早く。それ、しまって……」
児島　「はいはい」
　児島、弁当箱を戻す。
佑太　「一番、やべー奴が近くにいた」
児島　「人の席で、こっくりさんやってる方々に言われたくありませんが？」
佑太　「こじこじの席なら大丈夫かなって」
児島　「まあ、正解かもな」
湊　「どういうこと？」
児島　「そのままの意味だよ」
奈々　「もしかして……そういうの見える人？」
児島　「どうだろうね」
佑太　「もういいよ、お前ー」
　その瞬間、風で窓がガタガタと揺れる。
　表情が強張る三人（佑太、湊、奈々）。
　児島、教室の端を意味深に見つめて、
児島　「そろそろ帰らないとまずいかも……」
　三人、顔を見合わせ、叫びながら急いで廊下へ出る。
　児島、電気を消して悠々と廊下へ出る。

2.

学校・廊下　（夕）

　教室から出てきた児島に向かって、
佑太　「こじこじ、びびらせんなよ」
児島　「(笑って)勝手にびびってんだろ」
佑太　「責任取れよなー」
児島　「何のだよ」

佑太　「決まってんだろ、こっくりさんぶち壊しのだよ」
　　児島、からかうように、
児島　「座席使用料、頂きますが？」
佑太　「お前、マジ腹立つ」
児島　「お？　腹減ってんのか？」
　　児島、弁当の袋を見せて、
児島　「弁当いる？」
佑太　「いらねーわ」
　　その瞬間、スマホのお知らせ音が鳴る。
　　驚く４人。
　　佑太、スマホを取り出して、
佑太　「あっ、ビーリアル」
湊　「おい、タイミング」
佑太　「早く早く。２分以内」
奈々　「えっ、今？」
児島　「お前、本当こりないよね」
佑太　「いいからいいから、せーの」
　　各々ポーズをとる。２回のシャッター音。
　　その瞬間、背後から声。
やません「おいっ。お前ら、まだ残ってたのか」
　　４人、一斉に後ろを振り向く。
佑太　「ここで、やませんかよ」
　　走り出す４人。

３．学校・教室　（夜）

　　暗い教室。
　　床に落ちている白い紙。
　　やません、それを拾いあげ、
やません「まったく……くだらんことして」
　　紙をぐしゃっとまとめ、ゴミ箱へ捨てる。

（終わり）